

斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第3次報告

加藤 博文^{1*}・松田 功²・鈴木 健治¹
権平 拓也¹・岩波 連¹・小林 彩花¹・山添 晶久¹

1. 060-0810 札幌市北区北10条西7丁目, 北海道大学大学院文学研究科 2. 099-4113 斜里郡斜里町本町49, 斜里町立知床博物館

Preliminary Report of Recording and Mapping for Study at the Ikushina-Kita Kaigan Site, Shari, 2008 Field Season

KATO Hirofumi¹, MATSUDA Isao², SUZUKI Kenji²
GONDAIRA Takuya¹, IWANAMI Ren¹, KOBAYASHI Ayaka¹ & YAMAZOE Akihisa¹

1. Graduate School of Letters, Hokkaido University, N10W7 Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0810, Japan. **b-kato@let.hokudai.ac.jp* 2. Shiretoko Museum, 49-2 Hon-machi, Shari, Hokkaido 099-4113, Japan

はじめに

本報告は、斜里町以久科北海岸遺跡において斜里町立知床博物館の支援協力を受けて実施した調査の概要報告である。北海道大学と斜里町立知床博物館との当遺跡における共同調査は、2004年度および2008年度に引き続き3年目となる（加藤ら2005, 2009）。

今回の報告は、2009年秋に実施した第3次調査の報告となる。先の第1次調査および第2次調査では、海岸線の沿ってのびる砂丘上でも海側の砂丘縁にいくつかの群（クラスター）を形成して分布する竪穴群を確認するとともに、竪穴住居址内のテストピットの所見からトビニタイ文化期からアイヌ文化期に至る遺跡の形成過程が確認された（加藤ら2005, 2009）。

竪穴住居址（以下、竪穴と略す）の埋没しきらない窪みを利用した近世アイヌ期の熊送りと関わる遺構が検出されるなど遺跡空間を利用した活動の歴史が当初想定していたよりも重層化し、内容的にも複雑な変遷をたどっていることも明らかとなった。

2009年の第3次調査はこれまでの調査の成果に基づき、さらなる本遺跡の全容の把握と基礎的資

料の蓄積を目指して計画実施されたものである。

遺跡の概要

以久科北海岸遺跡（北海道教育委員会登録番号I-08-041）は、オホーツク海に面し東西に幅広く伸びる砂丘上、斜里町網走南部森林管理署1142林班に立地する遺跡である（図1）。

この遺跡の位置する砂丘は、海岸沿いに東西に形成された6列の砂丘列の内、砂丘Iに属する（荒田1979）。遺跡が立地する砂丘列は、全体で東西方向に3 km、南北方向に300–600 mの奥行きをもつ。砂丘列の特徴として北西–南東方向に斜行するいくつかの尾根や谷によって形成されている点を指摘できる。砂丘の標高は2–30 mにわたり、起伏に富んでいる（図2）。

この砂丘周辺には数多くの遺跡が知られている。遺跡の西端部にあたる砂丘丘陵先端の舌状部、標高17 m地点にはアイヌ文化期のガッタンコ1チャシが所在し、同じく8 m地点にはガッタンコ2チャシが所在する。またこの砂丘列北西側に位置する砂丘上にはガッタンコ貝塚が、北側の砂丘上にはタンネウシ貝塚が知られている。ガッタンコ1チャシは、砂丘先端の尾根部を3条の溝によって

断ち切る形で構築されており、チャシ主体部である平坦面が作出されている。一方、ガッタンコ2チャシはL字状の溝を1条めぐらせて構築したものである。2つのチャシが近在し、また貝塚も確認されている状況を考慮すると、2004年度の調査で検出された送り場遺構以外にもアイヌ文化期の遺構が本遺跡周辺に広がる可能性が高い。また砂丘南側には、縄文中期以降の遺物が検出されている尾河台地遺跡が知られている。

これらの諸点を総合すると、以久科北海岸遺跡は、砂丘上に存在する無数の竪穴群を中心とした複合遺跡である可能性を指摘できる。しかしながら現段階においても遺跡の踏査および測量範囲は遺跡の存在する砂丘範囲の1/5に満たず、遺跡に所在する竪穴の総数やその位置についても十分に把握されてはいない。遺跡の全体的な構造と規模を把握するためにも、詳細な測量図を含めた基礎的資料の蓄積が必要である。

調査体制

調査体制を表に示す。調査は北海道大学と斜里町立知床博物館の共同調査として企画された。また調査の一部は北海道大学の全学教育カリキュラム一般教育演習も兼ねている。また今年度の調査には、知床半島の歴史文化遺産の保存と活用および先住民考古学の国際比較研究のために来日していたオクラホマ大学ネィティヴアメリカン研究プログラムのJoe Watkins教授、Carol Ellick講師、デンマーク国立博物館SILAプロジェクトのUlla Odagaard博士の参加があった。

調査の概要

2009年度の調査の目的は、(1) 砂丘上に展開する未確認の竪穴群の確認と、(2) 周知の竪穴群の測量調査、(3) テストピットによる竪穴群の時期の確定という3つの課題を設定した。

特に新たな砂丘上の竪穴群の広がり確認については、これまで2004年度と2008年度の調査によって確認された海側の砂丘縁で確認された竪穴I群から竪穴V群に加えて、内陸側への伸びる砂丘列上の竪穴群を確認することを目指した。2009年

表. 調査体制.

調査主体者

望月恒子(北海道大学大学院文学研究科長)

調査担当者

加藤博文(北海道大学大学院文学研究科准教授)

松田功(斜里町立知床博物館学芸員)

調査参加者

鈴木健治(北海道大学大学院博士課程)・権平拓也(北海道大学大学院修士課程)、岩波連・小林彩花・山添晶久・佐藤侑士・杉浦章一郎(北海道大学文学部学生)、大澤風子・木村響・横山楓・山口翔太郎・斎藤遼・末森晴賀・森岡昌子・内藤徹也・徳永知久・大西凜・吉田萌・渡邊つづり・佐藤幸・望月奈那子・金本祐里子・和氣篤志・野口祐輔・青木駿介・坂本真惟・町田雄大・伊藤早織(北海道大学全学一般教育演習受講者)、村本周三(斜里町教育委員会嘱託職員)

度の踏査の結果、ガッタンコ1チャシの位置する砂丘の南側に新たに7基の竪穴の窪みを確認できた。この竪穴群を竪穴VI群とする(図2)。

これによって2004年度に確認した32基の竪穴の窪み、2008年に確認した67基の竪穴の窪みと合わせて合計107基の竪穴の窪みで構成される複数の竪穴群が分布していることが明らかとなった。なお確認された竪穴については、これまでと引き続き通し番号を設定している。

竪穴群の測量については、後の触れるように竪穴I群における試掘調査の過程で2004年度に確認したものと同様の近世アイヌ期の熊送りの遺構が竪穴覆土の上層に残されていることが明らかとなったこともあり、今年度予定していた竪穴群の詳細測量調査を次年度に実施することとした。

すでに詳細測量調査を終えている竪穴I群とII群については、過去2年度の調査と同様にテストピットによる竪穴の時期確認を行った。試掘は個々の竪穴の窪みの壁際に1×1mないしは、1×2mの試掘区を設定し、竪穴内部の堆積状況と出土遺物、火山灰の被覆状況等を確認することとした。ただし、2004年度にヒグマの送り場とトビニタイ土器が検出された3号竪穴については、後述するように、竪穴の西側半分について床面と壁面を確

認する部分まで掘り下げを行っている。本年度に試掘を実施した竪穴は竪穴1群のうち、8号竪穴と21号竪穴の計2基である(図3)。

成果

1. 3号住居址の調査

a) 2004年度と2008年度の調査状況

3号住居址は2号住居址の北側に位置する小型の住居址である。調査前の地表面からの観察ではその輪郭は隅丸方形を呈し、長軸短軸ともに5×5mの大きさである。2004年度に実施された試掘時には表土除去後に1体のヒグマの頭骨が樽前a火山灰(Ta-a)直下より確認され、近世アイヌ期の送り場として報告した(加藤ら2005; 佐藤2005)。

2008年度には2004年度に確認された送り場の広がりを確認する目的で、北東方向に試掘区を拡張し、さらにヒグマの顎の骨の一部など3点の骨片が検出している。これらは2004年度に確認したヒグマの頭骨と同一個体であると思われる。さらにヒグマ頭骨の確認面より20cm下位において、竪穴住居の床面直上の生活面と考えられる、汚れた黒褐色砂質土と、その下に固く引き締まった住居床面上を確認した。生活面直上からは北東-南西方向に長軸を持つ2列の炭化材とともに、擦文の高坏土器が口縁部を下にして伏せた形で出土していた。

b) 2009年度の調査

2009年度は、すでに試掘区を設定していた竪穴の西半分を掘り下げ、竪穴の床面および壁面を確認することとした。

図4に示したように3号竪穴住居址は、砂丘を形成する白色砂を掘り込み構築されており、壁面近くにおいては70cmほどの覆土の堆積が認められ、竪穴中心部では30cmほどの覆土の堆積となっている。床面は堅く踏み固められているが、調査範囲において炉や竈は確認されなかった。床面直上には部分的に炭化した材が確認されたが、画面的な広がりとして把握できる状態ではなかった。

竪穴覆土に含まれる降下火山灰などとの関係か

ら竪穴の年代を知りうる情報としては、2008年度に報告したように、以久科北海岸遺跡の竪穴群では、約1000年前と推定される摩周b5降下軽石(Ma-b5)が覆土内に数センチの厚さで確認されるものと、このMa-b5を掘り込み、覆土内にMa-b5を含まないものが存在することが明らかとなっており、10世紀前後を境として竪穴群を新旧に区分することができる(加藤ら2009)。本3号住居址については、図4に示したように覆土中にMa-b5は観察されない。さらに隣接する2号竪穴の堀上げ土との被覆状況から新旧関係を確認するために設定したトレンチ断面の層序からは、3号住居址が降下堆積したMa-b5を掘り込んで構築されたことが明らかとなった。これらの状況より3号竪穴住居は、すくなくとも10世紀以降に構築されたグループに属する。

3号住居址からの出土遺物としては、2008年度の調査時に高坏土器が出土している(加藤ら2009)。2009年度の調査では表土直下から口縁部を欠く小型深鉢土器が1個体(図4-1)と床面直上より小型深鉢土器が1個体(図4-2)と径15cmの円礫が出土した。

図4-1は、1層直下から出土した擦文の小型深鉢土器である。口縁部を欠損し、底径4.5cm、残存部の器高は8.5cmであった。実測図向かって左上の部位に2mm程度の帯状の器面の沈みが見られるが、明確な沈線であるかどうかは不明である。その他に文様と思われるものは見られない。また外面には確認できないが、内面にはミガキの調整が見られる。器壁は5mmと薄く、焼成はやや不良で色調は黒褐色である。図4-2は床面直上より出土したトビニタイ式の小型甕形土器である。底径4.1cm、残存部の器高は8.9cmであった。文様は見られないが、内面・外面ともにミガキの調整が施されている。器壁は5mmと薄く、焼成はやや良好で色調は褐色である。

2. 21号竪穴の試掘調査

21号竪穴は、竪穴1群の最も東端に位置する竪穴で1辺約7mの大きさの中型の住居址である。竪穴の窪みの北側に1×1mの試掘区を設定した。覆

土中に Ma-b5 の堆積は確認されず、出土遺物も検出されなかった。表土から 40 cm の深さで床面が確認された (図5)。

3. 8号住居址覆土上面で確認された送り場

8号竪穴住居の窪みの中央部に設置された 1 × 1 m の試掘区において、表土直下よりヒグマの犬歯を含む骨の集中が確認された。深さは約 10 cm で本竪穴においては火山灰との関係は明確ではない。ヒグマ骨の広がり方が南側へ広がる傾向を見せたことから、さらに幅 1 m で南へ 2 m 表土を除去すると完形のヒグマ頭蓋骨がつつれた状況で出土した (図6)。

ヒグマ骨は下顎骨も含めて、解剖学的位置をとどめており、頭蓋骨が当初配置された場所から大きく動いていないことを示している。2004年度に3号竪穴住居覆土上層で確認された同様のヒグマ頭蓋骨の出土状況と比べると、今回8号竪穴覆土上層で確認されたヒグマ骨の分布状況および骨の部位構成は、特異である。8号竪穴覆土上層のヒグマ骨は保存状態の良好な頭蓋骨に加えて、四肢骨を含んでおり、個体としても複数個体を含む可能性が高い。確認された範囲が部分的であるため、今後、ヒグマ骨や関連遺物の全体的な広がりを確認しなければ詳細は不明であるが、1個体以上のヒグマ骨が周辺に広がって分布している可能性は否定できない。

このヒグマ骨の時期であるが、出土層位から見て、2004年度に確認されたものと同様に近世アイヌ期に残されたヒグマ祭祀に関わる送り場であると推定される。今後、年代測定や死亡時期や年齢などの詳細な分析を含めて引き続き検討していきたい。

まとめ

2009年度の調査の概要を以下にまとめる。

a) 竪穴群の広がりについて

今年度の調査によって竪穴群の広がりが、海岸に沿った砂丘北端のみではなく、内陸側にも広がることを確認することができた。内陸側への竪穴

群の広がりは、砂丘上の竪穴群が砂丘の形成や地形変化の動きと連動して、竪穴群が時期的にどのように分布位置を変化させていくのかを知る上で重要な情報になると思われる。今後も砂丘南側における竪穴群の広がりを調査する必要がある。

b) 竪穴群の帰属時期について

昨年度の報告において、約 1000 年前と推定される摩周 b 降下軽石 (Ma-b5) を鍵層として新旧二つに分かれることを指摘した。今年度は、さらにこの Ma-b5 が竪穴周辺の堆積層中にも普遍的に堆積しており、竪穴間の新旧関係の確認においても有効な鍵層となることが確認できた。

c) 竪穴上層のヒグマ祭祀遺構について

先に見たように8号竪穴住居覆土上層においてもヒグマ頭蓋骨を含む近世アイヌ期の送り場が確認された。2004年度にも同様の遺構を確認報告しており (加藤ら 2005; 佐藤 2005)、今回の発見によって同様の遺構が周囲の竪穴の覆土上層に残されている可能性が高くなった。

遺跡周辺にはガッタンコ1チャシ、ガッタンコ2チャシとアイヌ期の遺跡が所在している。今回確認されたヒグマ祭祀遺構と合わせて考える時、以久科北海岸遺跡がアイヌ期においても重要な生活空間の一部として利用されていたことが明らかとなったといえよう。

送り場が確認される位置の特徴については、類例の追加による検証が必要ではあるが、2004年度の事例、今年度の事例と総合すると、竪穴の窪みに対するある種明確な空間的な意味づけを行った上で竪穴の窪みを意図的に利用していることが許されよう。今後、民族誌も含めた類例の検討や更なる調査を進めることで検証していきたいと考える。

謝辞

調査の実施にあたり斜里町立知床博物館をはじめとして、国有林内への立ち入りと作業行為の許可に当たっては北海道森林管理局網走南部森林管理署に格別の御配慮をいただいた。記して感謝申

し上げる。

引用文献

荒田治他. 1979. 斜里平野の地形. 知床博物館研究報告 1: 30-39.

大井晴男. 1984. 斜里町のオホーツク文化遺跡について. 知床博物館研究報告 6: 17-66.

加藤博文・松田功・木山克彦・布施和洋. 2005. 斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第1次報告. 知

床博物館研究報告 26: 61-70.

加藤博文・布施和洋・小林彩花・山添晶久・濱野由香里・安田龍平・岩波連・内山 晋吾. 2009. 斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第2次報告. 知床博物館研究報告 30: 97-107.

佐藤孝雄. 2005. 斜里町以久科北海岸遺跡のヒグマ頭骨. 斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第1次報告. 知床博物館研究報告 26: 71-76.



図1. 遺跡位置図(国土地理院発行1/25000地形図しやりNK-55-31-5-1,2をもとに作図). 1:以久科北海岸遺跡, 2:谷田遺跡, 3:以久科砂丘南遺跡, 4:尾河台地遺跡, 5:タンネウシ貝塚, 6:ガッタンコ貝塚, 7:ガッタンコ1チャシ, 8:ガッタンコ2チャシ, 9:禅竜寺遺跡, 10:本町2遺跡, 11:貯木場遺跡, 12:本町3遺跡, 13:本町1遺跡, 14:半沢公園遺跡, 15:栄町神社遺跡, 16:楓ヶ丘遺跡, 17:クシュンコタン遺跡, 18:ウエンベツ河口遺跡, 19:須藤遺跡, 20:ピラガ丘遺跡.

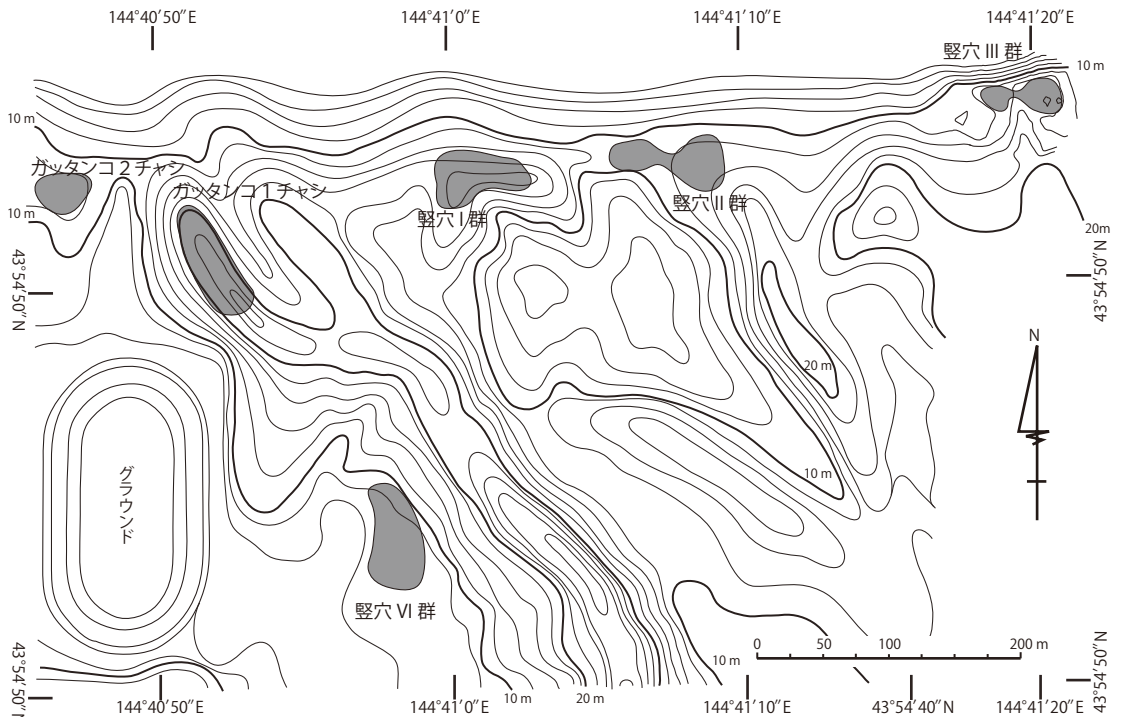


図2. 竪穴群分布図.

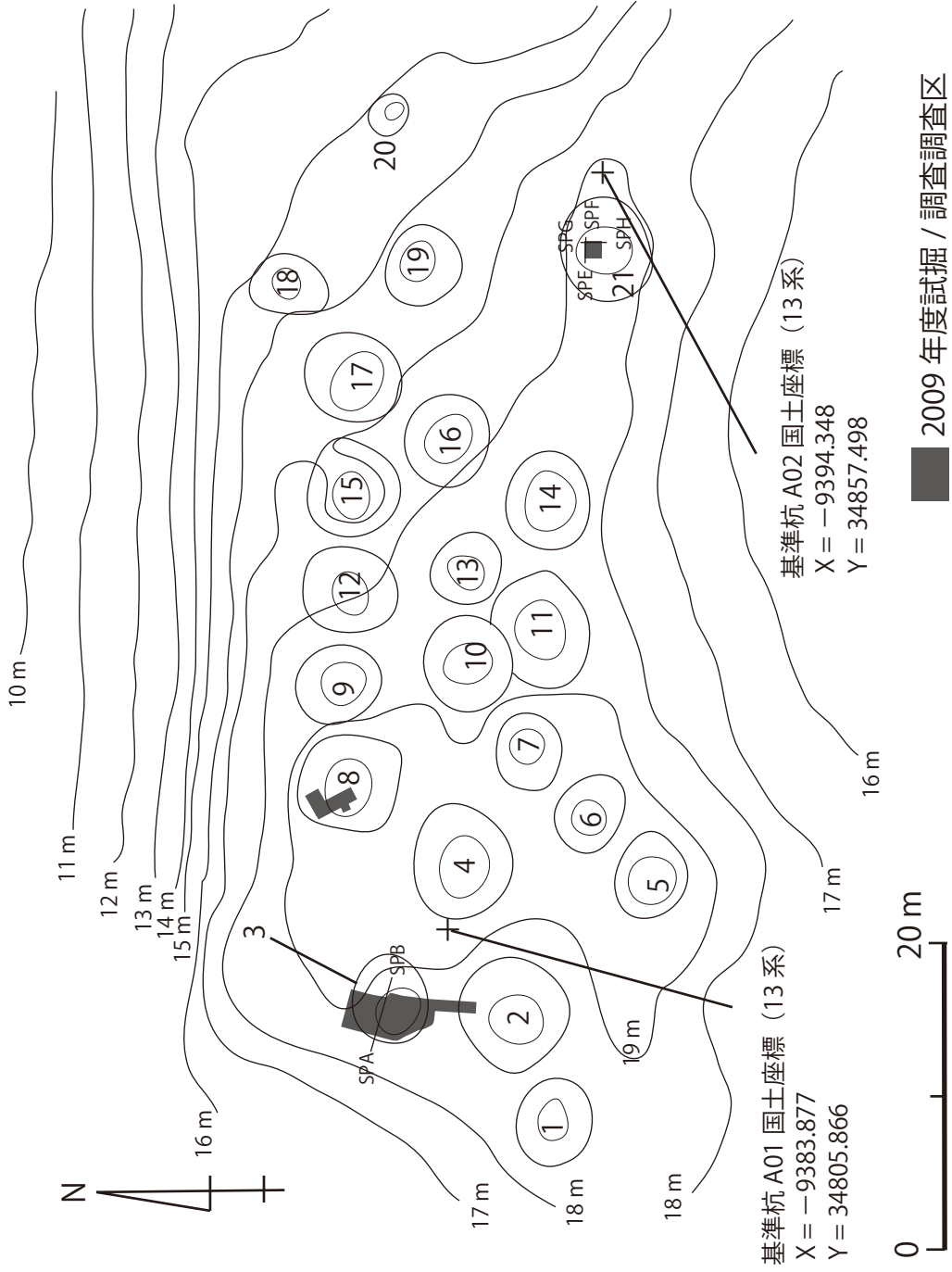


図3. 2009 年度調査区配置図.

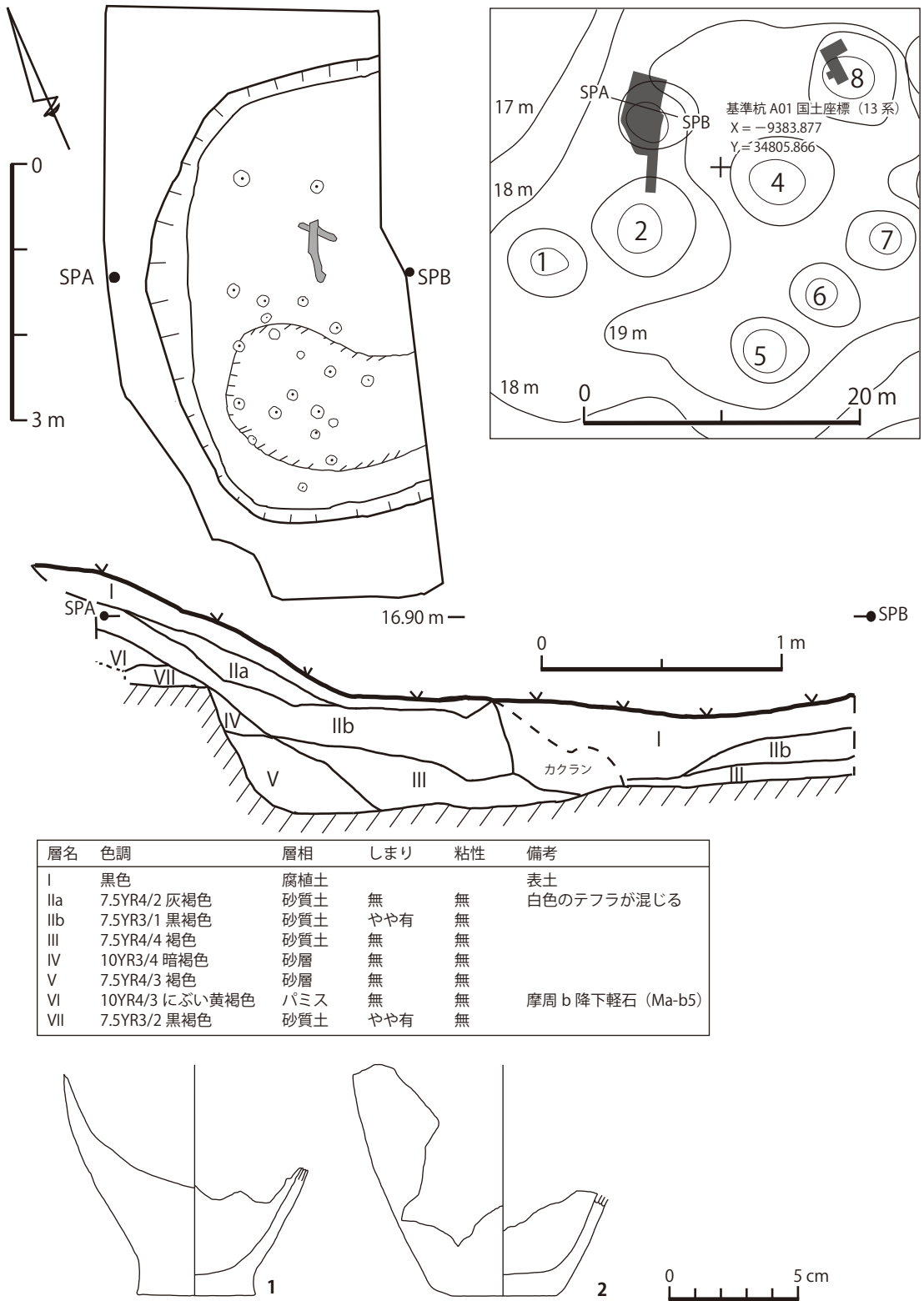


図4. 3号竪穴住居址平面，覆土層序，出土遺物実測図。

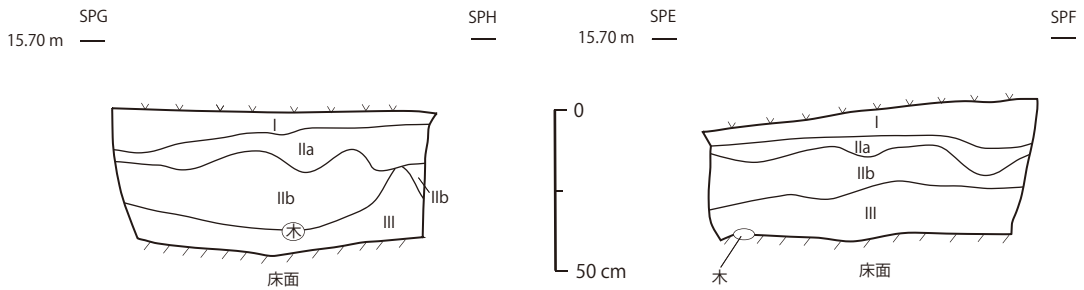
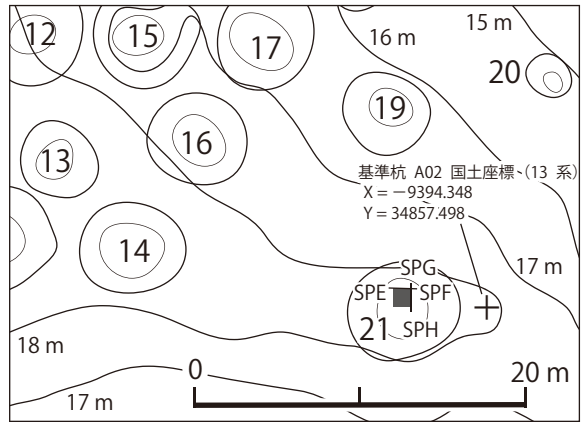


図5. 21号竖穴試掘区土層断面図.

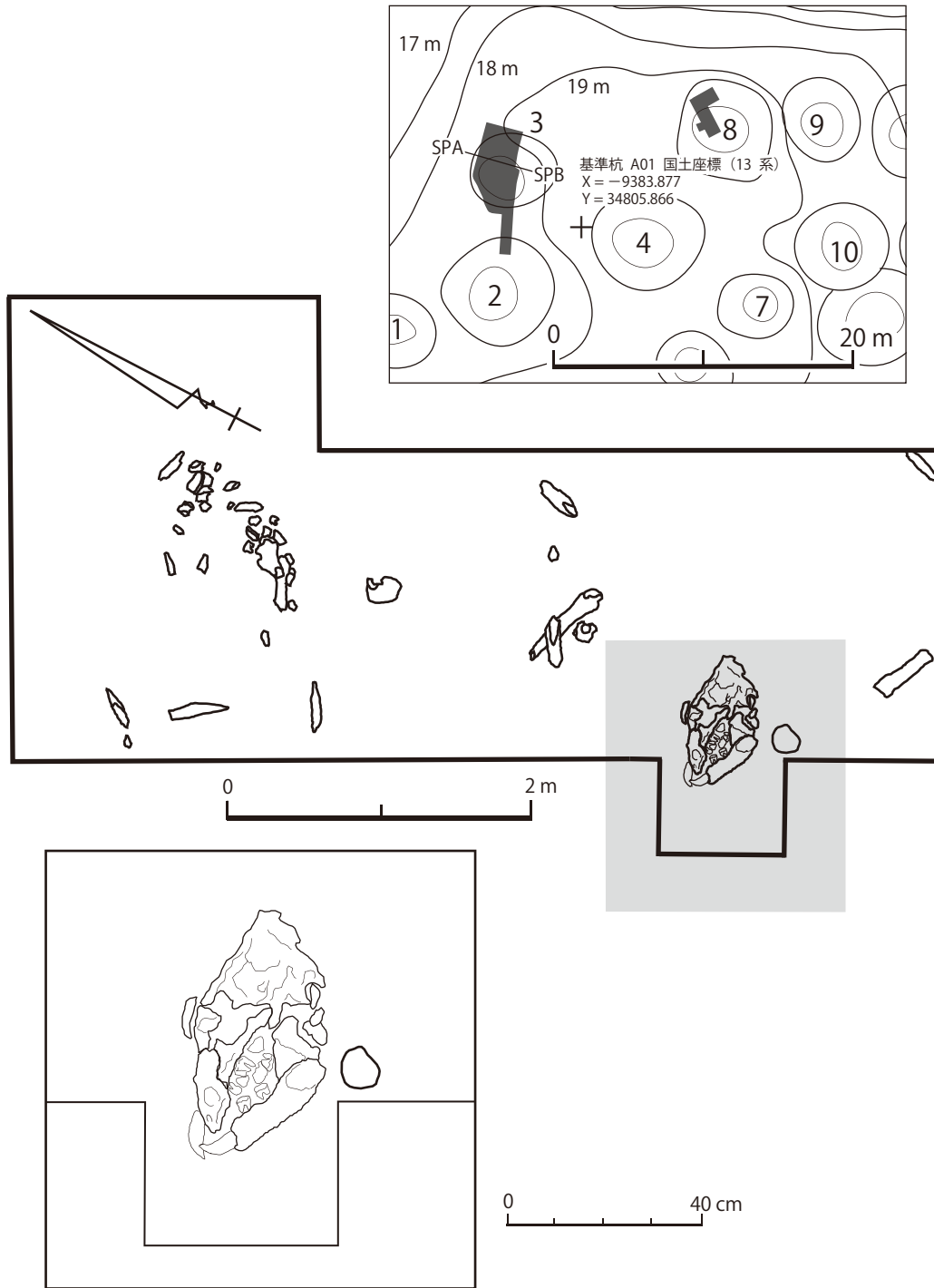


図6. 8号竖穴上層ヒグマ祭祀遺構出土状況図.